

# ナチュラルキス+ 7

*Keishi e Saboko*

---

風

*fuu*



エタニティ文庫

## Contents

ナチュラルキス<sup>plus</sup> 7 5  
～ side Keishi ～

花嫁の母として 303

書き下ろし番外編  
もっと甘い時を 325

ナチュラルキス  $\text{+}_{\text{plus}}$  7

～ side Keishi ～

## 1 強烈な安堵

現実が、こんなにも曖昧に感じられるのは初めてだな。

花嫁の手を握りしめ、佐原啓史は心の中で呟いた。いま啓史は音楽の流れるチャペルを歩いている。

手に入れたいと願っていた榎原沙帆子……彼女との結婚が、ついに現実になったんだよな？

俺はもう……安心していいの？

音楽に合わせて、祭壇に向かって沙帆子と足並みを揃える。数歩歩いたところで、彼女が大きくよろめいた。驚いたが、なんとか身体を支えてやる。

「ご、ごめんなさい」

「俺に掴まってる。支えてやる」

小声で囁いた啓史は、華奢な腕を自分の腕にからませて、ウエディングドレスの裾を踏まないようにゆっくりと歩を進めた。

参加者は少ない。啓史の友人である飯沢敦に、沙帆子の友人の飯沢千里と江藤詩織。そして沙帆子の両親と啓史の家族と伯父夫妻……

みんな俺たちを見つめているんだろうが、いま彼らと視線を合わせるのはどうにも気まずい。

沙帆子を気遣いながら、祭壇に向かっていた啓史だったが、最前列に立っている父の姿が目の端に入った瞬間、思わず父と目を合わせていた。

宗徳は固い表情をして啓史に強く頷いた。

父の深い愛情を感じた。

頷き返そうとしたが、沙帆子を支えている腕にふいに重みを感じて、啓史は彼女にさっと視線を向けた。

沙帆子の瞳がひどく不安そうに揺れている。それを見て、心臓がドクンと波打つ。

啓史は口元を歪めた。

もしか、彼女の心はまだ不安定なままなのか？

式は予定どおり進んでいる。もう安心していると思っただけ……

……まさか、結婚をやめたいと思いはじめているんじゃないだろうな？

だが、すでにここまで来たんだぞ。祭壇は目の前で、あとは階段を三段上るだけ。牧師は新郎新婦を待っているし、いまさら式が中止になるなんて、参加者の誰も思っちゃ

いないはずだ。

だが、だからって彼女の気持ちを無視していいのか？

沙帆子はまだ十七歳で、高校二年生……未成年だ。俺の気持ちを押し付けて、後悔させることになっていいのか？ 無理やり結婚して、しあわせになれるのか？

動揺のせいで眩暈すら感じていたところに、右側から何かを差し出された。

啓史はハッとして視線をやった。

「おふたりで」

沙帆子の世話係として側にいる婦人に囁かれ、それが何かわからないまま、彼は受け取った。

いつの間にか、祭壇は目の前にあった。音楽は鳴りやみ、場は微かな音すら拒みそうなほど厳粛な空気に包まれていた。

動揺を抑え、啓史は手にしたものを確認した。渡された二つ折りの紙を開いてみる。楽譜だった。さっと目を通し、見覚えのある曲だと気づく。

つまり、この曲をこれから歌うんだろう。沙帆子とふたりでこの紙を見ながら……

啓史はそれを沙帆子に差し出しつつ、いま彼女がどんな表情をしているのか確かめようとした。だが、ベールに覆われているせいではっきりとはわからない。

くそっ！ もどかしい……

できるものなら、そのベールを取り払ってやりたい。

オルガンの音が厳かに響き始めた。耳にしたことのあるメロディーに、聖歌隊の澄んだ歌声が混じり合う。それに合わせて、遠慮がちな歌声が背後から聞こえてきた。

式の始まりを祝う歌だろうか？ まるで神に捧げるように、礼拝堂に染み入っていく。

最後の一音が静かに消えていき、婦人が音もなく近づいてきた。そして啓史の手から楽譜を受け取り、去っていく。

牧師が、聖書の言葉について語り始める。それは啓史の心にダイレクトに響いた。望みが叶い、沙帆子との結婚が現実となっている。喜びだけを感じたいのに……そうできない。

彼女の気持ちに確信を持ってないからだ……

いまずぐ確認しろ、啓史。彼女の様子をいまずぐに。沙帆子の気持ちを確かめもせず、いまずぐ中止なんてできやしないと言い張るつもりなら、お前は最低だぞ。

ぎゅつと両手を握りしめ、ぎこちなく首を回す。沙帆子を見た啓史は、びくりと身を震わせた。

どう見ても、沙帆子の様子はおかしかった。

啓史は大きく息を吸い込んだ。

いまにも倒れそうなほど、沙帆子の身体が不安定に揺れている。

「では……誓いの言葉を」

その言葉は啓史の胸に<sup>むな</sup>しく響いた。啓史は息を止めて牧師を見つめ、口を開いた。「すみません。少し待っていただけますか？」

突然の啓史の言葉に驚くこともなく、牧師は<sup>うなず</sup>頷いてくれた。

沙帆子は驚いた様子で啓史を見上げている。啓史は顔を寄せ、沙帆子の瞳を<sup>のぞ</sup>覗き込んだ。べール越しなのがかもどかしい……

どうする？ 沙帆子に聞くのか？ だが、なんと？

式をやめたいか？

心の中で問いかける。

そんな問いなど、口にしたくない。だが……

「沙帆子？」

名前を呼んだが、その先を続けることができない。

「は……い？」

沙帆子はどこか呆けた返事をする。

こいつ、そんなにも冷静さを失っているのか？

ひどく胸が<sup>うず</sup>疼いた。

啓史は口を引き結び、沙帆子の手を握りしめた。

彼女の指はぎよっとするほど冷たかった。なぜか諦めに似た<sup>おちい</sup>気分<sup>おちい</sup>に陥る。

「せ、先生……」

泣きそうな声で沙帆子が呼びかけてきた。

ハッとして、沙帆子を見つめる。

どうしてか、じわりと<sup>あんど</sup>安堵<sup>あんど</sup>が湧き上がった。

彼女の啓史を呼ぶ声に、拒絶の響きはなかった。それどころか、自分に<sup>すが</sup>縋<sup>すが</sup>っているようにすら感じられた。

彼女に求められていると確信した。

「大丈夫だ」

思わずそう返事をしたが、情けないことに声が震えた。

沙帆子がほっとしたように小さく<sup>あご</sup>頷くのを見て、涙ぐみそうになる。

啓史は牧師に向かって顔を上げた。

「すみませんでした。続けてくださいますか？」

沙帆子は、式をやめたいなんて思っていない。

大丈夫だ。

ふたりの心の繋がりを強めるように、啓史は握りしめた手に、さらに力を込めた。

「新郎、佐原啓史……」

牧師の言葉に、啓史は大きく息を吸って止めた。

「貴方は、ここにいる榎原沙帆子を、病めるときも、健やかなるときも、富めるときも、貧しきときも、妻として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」

啓史はもう一度手に力を込めた。

胸にあるこの想いを、沙帆子に伝えたい。

「誓います」

嘘偽りなく、神に誓う。

こいつが俺の側にいてくれるのならば、俺はなんでもする。

「新婦、榎原沙帆子」

牧師が沙帆子に語りかけた瞬間、彼女の手がピクリと動いた。

「貴方は、ここにいる佐原啓史を、病めるときも、健やかなるときも、富めるときも、貧しきときも……」

これまでにないほど緊張する。

彼女はためらいなく、誓いの言葉を口にしてくれるのだろうか？

自分のときとは違い、牧師の言葉はひどくゆっくりに感じた。

心が折れそうなほどの怖れが湧き上がってくる。啓史は自分の指が小刻みに震え始めたのに気づき、それをごまかそうと、彼女の手をさらに強く握った。

「夫として愛し、敬い……」

啓史は瞬きも忘れ、沙帆子を見つめた。

心臓が痛いほどに鼓動を速める。

「慈しむことを誓いますか？」

沙帆子が啓史を見つめ返してきた。ふたりの目が合う。その瞬間、沙帆子が顔を強張らせたように見えた。

啓史はぐっと奥歯を噛みしめた。

沙帆子が牧師に向き直る。そして、口を開く。

啓史は知らず目を瞑った。

静まり返ったこの一瞬が、とてつもなく長く感じた。

「誓います」

声は掠れていたし、小さかった。けれど、その声に迷いは感じられなかった。

強烈な安堵に、膝から落ちそうだった。

知らぬ間に息を止めていた啓史は、喘ぐように息を吐き出した。

## 2 置き去りにされた思考

「それでは、指輪の交換を……」

呆けたように沙帆子を見つめていた啓史は、その言葉で我に返った。

結婚指輪は、母に預けたが……

牧師に渡してくれただろうか？

さっと視線を巡らせて指輪を探してみる。それらしきものを見つけれず少々焦ったが、牧師が手に取ったものを見て胸を撫で下ろした。昨夜見せてもらった、母の手作りのリングピローだ。

「このリングピローは……」

牧師は真つ白なリングピローを両手で持ち上げ、微笑みながら言葉が続ける。

「新郎の母による手作りです」

「あ、あら」

自分の母の驚いた声が聞こえた。

啓史は思わず、沙帆子の反応を窺った。

彼女もやはり驚いたようだ。

「かつ、かつわいい」

「うんうん、ほんとお」

江藤の言葉に、飯沢が同意する。

「佐原の母さん、すっげーな」

敦が大きな声を上げた。

「あっちゃんてば、場をわきまえた言葉を使わないと」

飯沢は年上の敦に遠慮なく小言を放つ。飯沢は敦の従妹なのだ。

敦はまるきり気にせず笑い飛ばした。敦の豪快な笑いがひどく好ましく感じられて、

啓史は微笑んだ。

「わっ、ほんとだ。すっごい可愛い！」

敦に注意を向けていた啓史は、隣から聞こえてきた甲高い声にハツとした。

新婦然としていた沙帆子が、この瞬間、いつもの彼女に戻った。

その表情には不安など微塵もなく、とてもやわらかな笑みを浮かべている。

「あ、ら、ま、まあ……まあ……」

おろおろした母の声が、最後は涙声になった。沙帆子の言葉がよほど嬉しかったのだらう。



父が「久美子……」と、母に呼びかける。

「母さん、良かったね。沙帆子さんに喜んでもらえて。夜なべして作ったかいがあつたじゃん」

弟の順平も、嬉しさを堪え、言葉を重ねる。

啓史はそのやりとりを聞く沙帆子を、ずっと見つめていた。

あーっ、やっぱりこの邪魔なペールを取り払ってやりたいな。でないと、彼女の表情を見られやしない。戸惑ったり、驚いたり、どんな些細な表情も見逃したくないのに……

「母さん、納得するものができるまで、三回も作り直したんだ。結婚が急で、沙帆子さんのために……」

順平の声が、途中からひどく震え始めた。

「自分はこんなことくらいしかしてあげられないからって……言って……」

半分泣いているような弟の言葉は、正直、気恥ずかしいことこの上ない。だが、じわりした喜びを啓史の胸に呼び起こす。

順平と違い、俺はお袋の思いをしっかりと受け止められていなかったなど、ひどく申し訳ない気分になった。

「馬鹿、お前が泣くな」

「なにすんだよ。いたいよ」

弟を思いやる兄の徹の言葉。そして照れ隠しに口にした順平の言葉を、面はゆく聞いていたそのとき、沙帆子が表情を歪めた。

「沙帆子」

彼女の反応に驚いた啓史は、思わず呼びかけた。

沙帆子が顔を上げ、ふたりは目を合わせる。

彼女の下脛にきらりと光るものがある。

「わ、わたし……」

声を震わせる沙帆子の頬に、涙が零れ落ちた。

沙帆子の様子を見つめていた啓史は、肘に何かがそっと触れるのに気づいた。見ると、婦人が真っ白なハンカチを差し出している。

一瞬、意味がわからなかったが、受け取ってすぐに理解した。

涙を拭いてやれということなんだよな？

俺がこいつで……沙帆子の涙を拭くのか？

いや、拭いてやりたい気持ちは、もちろんある。あるのだが……

物凄い羞恥心が湧いてきた。

沙帆子とふたりで壇上に立っているわけだし、当然、涙を拭いてやる俺の姿を皆が見る。

できれば、『お前、自分で拭け』と言いたい……

啓史はハンカチを握る手にぐっと力を入れ、羞恥しゆうちを投げ捨てた。そして、ためらいに囚とらわれる前に、ペールの下からハンカチを右手で差し入れる。

それに気づいた沙帆子が手を伸ばしてきた。

啓史はほっとした。沙帆子は自分で拭くつもりなのだろう。

だが、そうはならなかった。なんと沙帆子は啓史の手ごとハンカチを握りしめたのだ。そのまま沙帆子の目に押しつけられる。

なんとも間拔けな感じだったが……沙帆子に手を握られて、心が和なんだ。

啓史は左腕を伸ばし、彼女の背中にそっと触れた。

すると沙帆子は力をもたらったかのように、啓史の手を離して久美子に頭を下げた。

「あ、あ……の……あ、ありがとうございます……ございます」

ひどくきこえない言葉とお辞儀……けれどもどうにも愛しさが湧く。

あー、俺駄目だな……。こいつに、心を全部持っていかれてる気がする。

「や、やだわ。そんなにお礼を言われるほどのものじゃなくて……」

「わたしからもお礼を言わせてください」

困った様子の母にそう言ったのは、沙帆子の母親である美美子ふみこだった。

「久美子さん、ありがとうございます」

「まあ、ええ、こちらこそ、あ、あの。ありがとうございます」

母親同士のやりとりが、この場の雰囲気や和らげてくれたようだった。

色々と重く考えてしまっていたのが馬鹿らしくなった。

不安など抱く必要はないのだ。

なんの根拠もないのに、はつきりとそう感じられた。

いま彼女は前に向き直り、牧師を見つめている。その口元には自然な微笑みがあった。心が安定している。緊張も窺うかがえない。

啓史の視線を感じたのか、沙帆子がこちらを見上げてきた。

目が合った瞬間、なぜか沙帆子が驚きの表情を浮かべた。

不思議なものでも見るかのように目を見開いている。

な、なんだ、いったい？

さらに沙帆子は、奇妙な仕種しぐさをする。こちらを見つめたまま、もぞもぞと腰の辺りをまさぐっているのだ。

戸惑った啓史は声をかけた。

「沙帆子？」

「は、は、はい？」

啓史の呼びかけで、沙帆子は我に返ったようだった。

啓史が眉をひそめていると、沙帆子は気まずそうに、そろそろとハンカチを持った手

を胸の辺りに持ってきた。

どこか普通でない沙帆子が心配になり、「大丈夫か？」と声をかける。

「だ、だ、大丈夫なです」

「なです？」

わけがわからず、思わずおうむ返しをした啓史に、沙帆子はむっとしたように「です」と付け加えた。

こっちは無意識だったのだが、噛んだ言葉を繰り返されたことに腹を立てたらしい。

花嫁姿でふて腐れる彼女に、啓史は笑いが込み上げてならなかった。

いつもの沙帆子だ。愛しくてたまらない、いつもの沙帆子……

「うん」

しあわせを噛みしめるように、啓史は小さく頷いた。

タイミングを見計らっていたのか、牧師が「新郎」と呼びかけてきた。

「さあ、新婦へ贈りましょう」

牧師に促され、啓史は目の前のリングピローに手を伸ばした。

リボンやフリルの中に埋もれている指輪を確認する。真ん中にふたつの指輪が寄り添うように置かれている。

啓史は、小さなほうのリングをそっと摘んだ。

結婚指輪だ。結婚の証。

嵌めるのは薬指だよな？ 左手の……

啓史は身体を沙帆子に向けた。

これを沙帆子の指に嵌めるのだ。そう考えると再び緊張してきた。

啓史はごくりと唾を呑み込み、沙帆子に指輪を差し出したが、当の彼女は身体を正面に向けたまま、リングピローに真剣な眼差しを注いでいた。

こいつ、これから指輪の交換をするってのに、なんでこっちを向かない？

「沙帆子？」

咎めるような呼びかけに、沙帆子はハツとして首を回してきた。啓史が指輪を差し出しているのに気づき、慌ててこちらを向いた。

さっさと手を出せと左手で催促すると、ようやく差し出してきた。

やれやれ……

ほっとした啓史は、沙帆子の瞳を覗き込み、その手を取る。

ちっこくて細い指だよな。

啓史は彼女の薬指に、指輪をゆっくりと差し込んだ。

少しきつい感じはあったが、指輪は沙帆子の薬指に収まった。

薬指の指輪は……こいつが俺の妻である証明……

やにわに、心臓が大きく高鳴り始める。

啓史は指輪の嵌まった沙帆子の手を、味わうようにじつくりと見つめた。

「それでは新婦、新郎に指輪を贈りましょう」

牧師の言葉に、啓史は現実引き戻された。

今度は俺か……まあ、当然そうなるんだが……

顔を上げてリングピローを見る。

俺の指に指輪……か。

そう考えた瞬間、左手の薬指がピクッと引きつる。どうやら、指輪に対して指が軽い拒否反応を起こしているようだ。

だが、こいつは俺が沙帆子の夫である証なんだから……

なんとか自分を納得させようとしていた啓史だが、沙帆子がハンカチを手にしたまま、もたついているのを見て眉を上げた。

すっと手を伸ばし、ハンカチを取り上げる。沙帆子はほっとしたように、小さく頭を下げた。

彼女がリングピローに向き直ると、婦人が静かに歩み寄ってきた。そして啓史からハンカチを受け取っていった。素早く視線を沙帆子に戻すと、リングピローから指輪を抜き出したところだった。

彼女の視線は、啓史の手に注がれている。手を伸ばしてきたので、啓史も手を差し出した。

沙帆子の指先に自分の指先が触れている。

指輪を嵌めなければならぬのに、どうしたというのか、沙帆子はそのままだかない。

「指輪」

焦れて要求すると、沙帆子は我に返ったように慌てて頷き、指輪を啓史の薬指にあてがった。

震える指で指輪が差し込まれる。ちゃんとできるのかと思いい心配になったが、さすがにこれは手助けしてやれない。

ようやく指輪が啓史の薬指に収まった。

指輪の嵌まった自分の手には、なんとも言いようのない違和感がある。

沙帆子も、自分と同じように感じているのだろうか？

結婚の証なのだから、嬉しいはずなのだが……やっぱ、指輪ってのがな……

胸に湧くこの歯がゆさは、消し去れそうもない。

だからって、俺は……外そうとは思わないだろうな。

逡巡しつつ、啓史は指輪の嵌まった手をぐっと握りしめ、ゆっくりと開いた。

「よく似合います」

沙帆子が思わずというように言った。  
くすぐったかったが、もちろん嬉しい。けれど背後で誰かさんが派手に嘖き出し、嬉  
しい気分が霧散する。

敦の野郎、こんな場面で嘖き出しやがって。あとで覚えてる！

心の中で悪態をつきながらも、啓史は沙帆子に顔を寄せ、「そうか」と囁くように言っ  
た。

「では、誓いのキスを」

牧師の言葉に、啓史はびっくりと反応した。

……なんだって？

啓史は牧師を見た。

いま……キス？ ……と、言ったのか？

牧師はやわらかな笑みを浮かべている。

啓史をからかかって楽しんでいるかのようだ。

牧師から再び促され、啓史は覚悟を決めた。

結婚式に、誓いのキスは付きものだろう。キスをしないことには式が終わらないのだ  
から、やるしかない。

沙帆子に向き直ると、ベールに覆われた彼女は牧師に顔を向けたまま、身じろぎもし

ない。

当然か……。こいつも俺と同様に困惑しているんだろう。けれど沙帆子は自分から啓  
史のほうを向いてきた。

彼女と見つめ合う体勢になり、堪らなく羞恥が込み上げる。式の参加者たちも、固唾  
を呑んで見守っているようだ。物音一つしない。

俺が動くしかない。こうなったら、さっさと済ませよう。

まずは沙帆子の顔を覆うベールを上げればいいんだよな。そして、キス……

参加者の面前でか？

誓いのキスなんてものにまで頭が回っていなかったからな。式が中止になりはしない  
かと、そればかり気を揉んでいたから……

くそおっ！

啓史は内心で悪態をつきながら、ベールに手をかけた。パツと払うようにベールを上  
げて、目にもとまらぬ速さでキスをして終わりにしようと思っていたのに、そうはでき  
なかつた。

何やら心臓が、これまでにない速さで鼓動を打ち始めた。

啓史は、ゆっくりとベールを持ち上げる。

これまでベール越しにしか見られなかった沙帆子の顔に、目を奪われた。

その美しさに息を呑む。  
赤みを帯びた唇が、彼を誘うように薄く開いている。  
胸が震えた。

「綺麗だ……」

そう呟いた啓史は、無意識のうちに沙帆子の唇に自分の唇を重ね合わせていた。

### 3 夢のような現実

人前でキスをしてしまった。

いまの自分の行為を参加者全員の記憶から消し去りたい。

どのくらいの時間、唇を重ねていたのか、まるでわからない。だが、一秒や二秒でなかったのは確かだ。

俺としたことが、我を忘れるなんて……

啓史は自分に寄り添う沙帆子を思わずギロリと睨んだ。

こいつがあんまり綺麗だったせいで……

「それでは、結婚証明書にサインを」

牧師が式を進める。結婚証明書にはふたりの結婚を承認する参加者の署名が、すでに書かれてある。

次はこの紙にサインか……あと何が残っているんだろう？ もうそろそろ終わりじゃないのか？

誓いのキスで我を忘れるという手痛い失敗をしたせいで、ヤケになってそんなことを考える。

さつさとサインしようとしたが、用意されているペンを目にして唸りそうになった。

ふさふさの羽根のついたペン。派手すぎるし滑稽だ。

こんなもので書けたなんて、冗談が過ぎるだろ！

あー、結婚式なんてもの、やっぱり俺には荷が重い。

そう考えていると、口元に皮肉な笑みが浮かんでしまう。

あれほど望んでいたくせに……

啓史は深呼吸し、気持ちを切り替えて結婚証明書と向き合った。

この場の雰囲気がそう感じさせるのか、とても神聖なものに映る。

啓史は羽ペンを手にし、丁寧に自分の名を書き始めた。少し指先が震えているように見え、彼を見つめているに違いな牧師と沙帆子の視線が気になってならなかった。

サインを終えた啓史は、沙帆子にペンを手渡した。羽ペンを手にした彼女は、物珍し

そうに羽根を揺らす。その無邪気な仕種しぐさに、啓史は噴き出しそうになった。化粧のせいで大人びて見える沙帆子。けれど中身はいつも同じだ。当たり前なんだが……

しかし、いつもの沙帆子ではないような錯覚おぼやに陥る。そう、まるで数年後の成人した沙帆子を見ているようだ……

沙帆子は証明書を前にしたが、なかなかサインをしようとせず、その用紙をじっと見つめている。

もどかしくて仕方なかった。さっさとサインして俺を安心させてくれればいいものを……

けれど、どうやら、彼女は参加者たちの署名を、ひとつひとつ確認しているようだ。サインをためらっているわけじゃない。そうわかっただけでほっとする。

気が済んだのか、沙帆子はようやく自分の名前を書き始めた。彼女らしい温かな文字が証明書に書き加えられるのを、啓史は見守った。

牧師が最後にサインをし、慈愛のこもった笑みをふたりに向ける。啓史は下腹に力を込め、息を詰めて牧師を見つめ返した。

「新郎、佐原啓史さん、新婦、沙帆子さん、ご結婚おめでとございます」  
牧師の祝いの言葉に、思わず熱いものが込み上げてきた。

「ありがとうございます」

ふたりは夫婦になったのだ。そう心から感じられた瞬間だった。

「ありがとうございます」

心の底から湧き起こってきた感謝の気持ちを言葉にし、啓史は深く頭を下げた。

沙帆子も啓史と同じように「ありがとうございます」と頭を下げながら礼を言う。

それは、ずいぶんぎくしゃくした動きで、恥ずかしげで、小さな声で……

つまり……可愛らしすぎた。

おかげで啓史の胸は、不本意ながら、とんでもなく甘く疼うずいた。

そんな自分に反発を感じ、思わず顔が歪ゆがみそうになる。啓史は口元を引きしめた。

「貴方がたおふたりは、列席者の皆様に見守られ……いま、夫婦となれました」

牧師の声は、ありえないほど強く啓史の心に響いた。

「若い貴方がたが生きてゆく長い道の途中には、ふたりだけでは解決できない出来事が起こるかもしれません」

牧師と目が合った。それだけのことなのに、自分が背負った重い責任を感じる。

「そのときは、今日この場で、おふたりの挙式を見守ってくださいました皆様にも、迷うことなく助けを求めなさい。必ず助けの手をもらえることでしょう」

啓史は、背後にいる家族の存在を強く感じた。そのせいで、ひどく落ち着かない気分になる。

家族は俺に多大な愛情を注いでくれた。だが俺は、自分勝手な発言をし、好き勝手に行動してきた。

俺、何も返していないよな。

「色々なことが起こりえるでしょう。疑いが頭をもたげるときもあるかもしれませんが。」

牧師は啓史と沙帆子にしっかりと視線を合わせ、言葉を続ける。

「相手を信じる心を忘れず……そして、信じられていることへの感謝を忘れず、これからの人生をふたりに築き上げていってください」

啓史は大きく息を吸い込んだ。

決して不義はしない。信頼される夫になろう。

啓史は固く誓った。

オルガンの音が響き始めた。

また聖歌を歌うらしく、婦人が楽譜を手渡してきた。

式が始まったばかりのときとは違い、啓史は落ち着いて楽譜を開き、沙帆子に寄り添うように立った。

ふたりの結婚を祝すような明るい歌だった。

沙帆子の歌声を耳にしながら、啓史も満ち足りた心で歌った。

「では、新郎、新婦、ご退場されます」

退場の言葉に、思わず足先から力が抜けていった。

ようやく式が終わる。

参加者に身体を向ける沙帆子を見守る。沙帆子のドレスの裾を整えにやってきた婦人が作業している間に、啓史は皆に視線をやった。

まず最初に目が合ったのは父だった。そして母……

式直前の、息子の怯えと緊張を知っている父。言葉を交わさずとも父の安堵が伝わってくる。

そして徹と順平、伯父夫婦に敦……表情から内心は窺い知れないが、皆祝福してくれていると感じられた。

啓史は右側の列に顔を向け、沙帆子の父、幸弘と見つめ合った。幸弘は、なんとも表現しようのない複雑な表情を浮かべている。

幸弘とはこのひと月、互いに思いをぶつけてきた。辛らつなことも言われたし、脅すようなことも言われた。けれどそのすべての言葉に、娘への愛があった。

沙帆子を大切に思う気持ちは、どちらも負けていないと思う。幸弘は父として、啓史



は夫として、これから沙帆子を慈しんでいく。

いつの間にか、啓史と沙帆子を見送る曲が流れ始めていた。

啓史は硬い笑みを浮かべている。美美子と最後に目を合わせ、感謝を込めて小さく頭を下げた。

彼の右腕に沙帆子の手を添えてきた。その感触をじんわり味わいながら、啓史は左手で彼女の腕にそっと触れた。

彼女と足並みを揃えて、ゆっくりと段を降りようとした啓史だが、沙帆子がためらう素振りをしているのに気づいた。

問うように顔を覗き込む。

「あ、あの……」

沙帆子は口ごもり、後ろを振り返る。

「どうされました？」

啓史が尋ねるより先に、婦人が声をかけてきた。

沙帆子はおずおずと、婦人に話しかける。

「あのお、リングピロー……」

リングピロー？

微笑んだ婦人は、すぐさまリングピローを手に取り、沙帆子にそっと手渡してくれる。

なんだ、これが欲しかったのか？

「あ、ありがとうございます」

嬉しそうにはにかむ沙帆子を見て、啓史の口元も緩む。

母も嬉しくてならないだろう。

久美子に目を向けると、案の定、目を潤ませていて、いまにも泣き出しそうだと。

胸に熱い思いがぐっと込み上げてきて、啓史は慌てて母から視線を逸らした。涙目な人かになったら、後々、敦からひやかされるに決まっている。

そう考えて敦に目をやると、挑発的な笑みを浮かべ、威嚇するように拳を突き出してきた。彼らしい祝福に、思わず苦笑してしまふ。おかげで心に余裕をもてた。

リングピローとブーケを抱え、沙帆子が改めて腕を握りしめてきた。啓史は沙帆子を気遣いながら、ゆっくりと足を踏み出した。

そのタイミングを待ちかまえていたように、敦がこちらに何か投げしてきた。ピンクと白の小さなものが空中をひらひらと舞う。

花びらだ。

他の参加者も投げ始め、啓史と沙帆子の頭上にハラハラと舞い落ちてくる。

沙帆子は顔を上げ、瞳をきらめかせて落ちてくる花びらを見つめている。

啓史は、沙帆子のその表情にしばし心を奪われた。

すると突然、光が差し込んできた。その方向に目を向けると、大きな扉がゆっくりと開き始めている。

神聖な光だ……

啓史は思わず目を細め、眩しい光の正体を見定めようとした。そこに、彼をここまで導いてくれた幸運の女神がいるように思えてならなかった。

これから、人生とともに歩む沙帆子に目を向け、黙ったまま見つめ合った。

バレンタインデー以前のふたりは、ただの教師と生徒でしかなかった。

特別な繋がりなどなく、彼女を手に入れられる可能性などまるでなかった。

どれほど苦しんだか……思い出したくもない。

それが、バレンタインデーの日、突然チャンスが舞い込んだのだ。

あれから今日まで、天国と地獄をつないでいる梯子を、不安定な足取りで上ってきた。いつ地獄へと転落してもおかしくない状況がずっと続いて……

けれど……俺はいま、ここにいる。

花嫁姿の沙帆子が自分に寄り添う、この夢のような現実……

#### 4 限界と諦め

教会から外に出て、啓史はようやくほっと息をついた。だが目の前に延びる赤いカーペットに気づいた途端、顔が歪んだ。

真つ赤なカーペットは、この場にはずいぶん浮いているように感じられた。

カーペットの行き先にあるものを見れば、こいつがどんな目的をもって敷かれているかは一目瞭然<sup>いちもくりょうぜん</sup>。

嘘だろ……

「先生……」

沙帆子に呼びかけられて啓史は顔を向けたが、これから自分に強いられることを思うと、言葉が返せなかった。

彼女だって、すでにこのカーペットが何を意味しているのか、気づいて……

「あ、あの、これから……？」

啓史は沙帆子の言葉に顔をしかめた。

こいつ、まさか、まだ気づいてないのか？

決まってるだろ！と、鋭く口にしようとしたところで、参加者たちがぞろぞろと教会から出てきた。

沙帆子の友人の飯沢と江藤が最初に出てきて、沙帆子に「おめでとう」と声をかけた。次に出てきたのは、橘の伯父夫婦だった。

「おめでとう」とふたりから祝われ、「はい」と短く返し、頭を下げる。そんな啓史の肩を、突然敦が掴んできた。

「佐原、やったな」

「あ、ああ」

何がやったなのか……

敦の勢いにつられて返事をしたものの、その言葉はちよつと違うだろうと思う。

「啓史兄さん、おめでとう」

横合いから顔をにゅつと突き出したのは順平だ。

ずいぶんと瞼が赤く腫れている。どうやら泣いたらしい。啓史は照れくさくなり、順平の頭を軽く小突いた。

今度は背中を叩かれた。確かめるまでもなく、徹だとわかる。

徹は啓史と目を合わせただけで、何も言わずに行ってしまった。

「啓史さん」

母の声に、啓史は振り返った。

順平よりもさらに目を赤くした母は、感無量の面持ちで何度も何度も頷いた。父は無言で啓史を見つめ、母を促して皆のあとに続く。

感謝を胸に両親の背中をじっと見つめていた啓史は、沙帆子の両親が寄り添いながら、こちらに声もかけずに去っていくのに気づいた。

幸弘と美美子のその姿は、ひどく啓史の胸を疼かせた。喉元に込み上げるものを呑み下し、啓史は沙帆子に視線を向けた。

彼女は泣きそうな顔で、両親の背中を見つめている。

啓史の胸は更に疼いた。

自分がとんでもない悪人になったようだ。

仲の良い親子の間を、無理やり引き裂いているような……

啓史の視線を感じたのか、沙帆子はこちらを見上げてきた。

いま、彼女は何を考えているのだろうか？

その胸には、どんな思いがあるのだろうか？

ためらい？

後悔？

恐れ？

何も言わずに見つめてくるばかりの沙帆子に、不安が増す。彼女の表情は、どう見てもしあわせな花嫁のそれではない。

「せんせ……」

「それでは」

沙帆子の声は、牧師によってかき消された。正直、沙帆子の言葉のほうが必要だったが、彼女はすでに口を閉ざし、牧師に注意を向けている。

こいつ、何を言おうとしたんだろう？ 気になる……

「新郎様、新婦様、おふたりで、祝いの鐘を鳴らしていただきましょう」

うっ！ そ、そうだった。

すっかり頭から消えていた。赤いカーペットと、その先にある……鐘のこと。

さっと視線を飛ばし、顔が強張る。参加者たちが、十メートルほど先にある教会の鐘の側に立っていた。

この真つ赤なカーペットの上をこいつと歩いて、あの鐘を鳴らす……

こんな恥ずかしい演出を設定するなんて……馬鹿じゃないのか？

苛立ちとともに、啓史はこの式がスペシャルコースであることを思い出した。この演出は、スペシャルだから……なのか？ それとも全コース共通の決まり事なのか？

とすれば……スペシャルな演出とはいったいどんなものなんだ？

いまになって激しい後悔に襲われた。あのときは、式までの日数がわずかしかなかったし、沙帆子のために最高の式にしてやりたかったから、自らスペシャルにしてほしいと頼んだ。

けれど、どうにも眩暈がする。

こんな茶番、付き合いきれない。できれば、この場から沙帆子連れて逃げ出したい。だが、もちろんそんなことはできない。

諦めるしかないんだよな……

すると、追い詰められた気分である啓史をあざ笑うかのように、演出のための音楽が流れ始めた。

む、無理だ、絶対無理だ！

いや、何を言ってる、ここは耐えるしかないだろ？

自分に我慢を強いたせいで、口元がヒクヒクと引きつる。

「先生」

沙帆子のおおずおとした呼びかけに、啓史は振り返った。

嫌そうな顔を見せてはいけないと、必死に真顔を保つ努力をしたが、無駄だった。

口元を引くつかせている啓史の顔を見た沙帆子は、ぎょっとしたように目を見開く。

「ごめんなさい」

啓史は、沙帆子の謝罪に驚いた。

「なんで謝る？」

「な、なんか……」

沙帆子は口ごもり、ひどく申し訳なさそうに言葉が続ける。

「ひ、必要に駆られた……っというか」

必要に駆られた？

急に笑いが込み上げてきた。安堵あんどからのものだった。

彼女の表情には、ためらいも後悔も恐れもない。

こうなったら、スペシャルだろうがなんだろうが、どんな茶番でも付き合っつてやる。

花嫁衣装に身を包んではいるものの、いまの言動はいつもの沙帆子だった。

啓史は沙帆子に手を差し出した。

「沙帆子、行こう」

彼女は小さく頷うなずき、笑みを浮かべた。そして啓史の腕にそっと手をかける。

ふたりを待っている人々に視線をやった啓史は、迷いを振り切って、沙帆子とともに

赤いカーペットを歩き始めた。

鐘の前に到着すると、スタッフの指示でふたりは紐ひもに手を添えた。

沙帆子の手を上から掴んだ啓史は、スタッフの合図を待たず、勢いよく紐を引っ張った。

ささやかな抵抗だ。

スタッフの驚いた顔を見て、少し気分がスツとする。

鐘の音が、空いっばいに響き渡った。

神の住む天国が本当にあるなら、いまの感謝を鐘の音に添えて運んでもらいたい。いたく世話になった幸運の女神のもとまで。

そう思って見上げた青空は、眩しいほど輝いて見えた。

鐘のある場所をあとにした啓史を待っていたのは、うんざりするほど長い大撮影会だった。

もちろん、花嫁の沙帆子とのツーショット写真も、両親との写真も、欲しくないわけではないのだが……

「では、次は屋内での撮影となりますので、皆様どうぞこちらへ」

にこやかな顔でスタッフスタッフがが促してきて、啓史は呆れ返った。

こんなに撮ったのに、まだ撮るっつての？

こいつはまさか、スペシャルコースを選択したせいなのか？

「新郎様？」

どうなさいました？ という目を向けられ、啓史は眉をきゅっつと寄せて、沙帆子の手

を取った。

すでに決まっていることに、いちいち盾突くのはやめたほうがよさそうだ。

啓史はこれから起こることが、どんなに己の意に沿わなかるうが、逆らうまいと心に決めた。

集団を引き連れて、啓史は写真撮影用らしい部屋に入った。

撮影の合間、場は和やかな雰囲気ききに包まれていたが、啓史は、時折幸弘が自分に向けてくる眼差しが気になってならなかった。勝負に勝った者が敗れた者を目の前にして抱く心苦しさのようなものを、強烈に感じてしまう。

集合写真と両親たちとの写真を撮ったあと、ふたりの両親と啓史と沙帆子を残して、他の参加者はスタッフの指示でぞろぞろと部屋から出て行った。

そのあと、沙帆子と啓史は、両親たちがふたりを見つめる中、カメラマンに様々なポーズを要求され、たくさんの写真を撮られた。

頬がくっつきそうなほど顔を寄せたり、彼女を後ろからそっと抱きしめたり……

すでに諦めの境地にいたからできたのだと思う。そうでなかったら、苛立っていちいち拒んでいたに違いない。

こんなチャラチャラした服を着て、他人に言われるがまま、恥ずかしいポーズを取っている自分の写真なんて、絶対に見たくないな。

けど……花嫁姿の沙帆子は……

見たいよな……

「では、新郎様。こちらに」

啓史は指示通りに動こうとしたが、沙帆子は美美子と幸弘の側について、まるで自分には無関係なように彼を見つめている。

「沙帆子？」

「新郎様おひとりで、数枚撮らせていただきますので」

啓史は耳を疑った。

沙帆子が一緒だからこそ、我慢してカメラの前に立っていたのに……

「俺、ひとりの写真なんて、必要ないですよ」

啓史は強く反発した。

これまでおとなしく従っていたが、ひとりでカメラの前に立つだなんて恥ずかしくて、できるわけがない。

「啓史」

論ずような父の呼びかけに、啓史は口元を歪めた。

「ほんの三枚ほどですので……。あとは新婦様の写真を撮りまして、撮影は終了となります。もうしばらくご辛抱いただけたらと……」

スタッフはまるで啓史をなだめるように言う。むかついた。聞きわけのない子どもじゃないのだ。そんな風に言われたくない。

「啓史、辛抱しろ。手間取らせるな」

幸弘に叱責しじまされてしまい、顔が赤らんだ。

「わかってますよ」

しぶしぶ返事をし、啓史はスタッフの指示する位置に立った。

くそっ！

辛抱だ、辛抱……我慢しろ、啓史。

三回どころではない数のフラッシュを浴びながら、啓史は何度も自分に言い聞かせた。

## 5 満ち足りる触れ合い

いつまで経ってもケリがつかないんじゃないかと思うほど長かった写真撮影がようやく終わり、啓史は両親とともに新郎の控え室に引き揚げてきた。そして、新郎専用の椅子に座らされる。

まったく、新郎専用の椅子などなくていいのに……

全部同じ椅子でいいじゃないか。こんなものに座っていたら、俺は新郎だぞと言っているようなものだ。尻のあたりがムズムズしてならない。

スタッフの話だと、沙帆子の準備さえ整えば、すぐに披露宴会場に移動することだった。

話し好きの母は、スタッフに先ほどの写真撮影の様子を楽しげに語り始めた。息子と嫁自慢までされ、どうにも顔が強張こわばってならない。真顔で聞いていられる内容ではない。沙帆子の自慢ならまだしも、話の半分は自分のことだ。

「はーっ」

「啓史。飲むか？」

隠れてため息をついていた啓史は、目の前にグラスを差し出されて顔を上げた。

父親は、いま啓史がどんな思いでいるか察しているらしく、苦笑している。

「父さん……ああ、うん。ありがと」

グラスの中身を口に含む。

レモン水か？

酸味の中にほんのりとした甘味があった。半分ほど喉に流し込むと、かなり気分が晴れた。

「うまいな。父さん、ありがと」

「ああ」

宗徳はウーロン茶を口に含みながら、椅子に座った。

「父さん？」

「うん？ なんだ？」

自分から呼びかけたくせに、啓史は父にかける言葉が見つからなかった。

胸につかえているものがあるのに、自分が何を言いたいのかわからない。イライラする。

「いや……。ごめん、なんでもない」

啓史は唇を噛み、宗徳から視線を逸らして床を見つめた。

さっさと披露宴が始まってくれればいいのに……

花嫁の準備ってなんなんだ？

とにかく早く、すべてを終わらせたいのに……焦れたいっただらない。

苛立ちのせいで、啓史は知らぬ間に拳で腿を叩いていた。

「もつと……」

父の声を耳にし、啓史は顔を向けた。

「味わえ」

もつと味わえ？

レモン水のことかと思ひ、啓史は左手に持っていたグラスを持ち上げた。啓史の仕種

に、宗徳は笑いながら首を横に振り、「式だ」と小声で言う。

式を味わえ？

……あ、ああ……そういうことか……

ようやく意味がわかった。一生に一度の結婚式なのだ。確かにしっかりと味わっておくべきだな。

だが……いまだに不安なのだ。

式直後の沙帆子を見て、安心できたはずなのに……こうして離れ離れにされると、キリキリとした不安がまた襲ってくる。

ひとの感情は一瞬で変化するものだ。式を終えて控え室に戻った沙帆子が、いまになって結婚をとりやめると言わない保証はどこにもない。

ひとの心の中など覗けない。

互いの愛情を確認し合い、それなりの付き合いを経たあとであれば、こんなにも不安を抱えて式に臨むこともなかったのだろうが……啓史と沙帆子の付き合いは、ほんのひと月だ。

そもそも、この結婚話は彼女が引越しをしたくないと啓史に相談したことから始まった。

ありえないよな……



他人が聞いたなら、嘩然とするだろう。

だが俺は、そんな小さなきっかけを無理やりチャンスに結びつけた。でも……

何度ものキスに、親密なふれあい。あいつは嫌がったりしなかった。つまり、あいつの中に、俺への愛情が芽生えたということだろう？ それが何より大事なことじゃないのか？

もちろんかつて沙帆子がチョコを渡そうとした相手である、広澤のことはいまだに気になる。沙帆子はいいつのことを……

そこでノックの音がした。啓史はパッと顔をドアに向けた。

なんだ、もう沙帆子の準備ができたのか。もつとかかるかと……

「お邪魔していいですか？」

ところが声の主は敦だった。途端に喜びが萎む。

なんだ、こいつか……

敦は部屋にいる啓史と両親に視線を回して、返答を待っている。

「飯沢さん、もちろんどうぞ」

母が嬉しそうに答えると、敦は頭を下げつつ啓史の側にやってきた。

「失礼」

そう言いながら、啓史の隣の椅子に腰かける。

「なかなか来ないから、様子を見にきた」

「彼女の支度待ちだ」

「ふうん。花嫁さんは色々あんだな。披露宴の会場、こぢんまりしてたが、いい感じだったぞ」

「そうか」

他に言いようがなく、啓史は愛想なく返事をした。

「式、よかったぞ」

「そうか」

「なんだ？ 佐原。お前、自分の結婚式だつてのに、テンション低くないか？」

啓史は無神経な敦にむつとした。

余計なお世話だ。

「まあ、わからんでもないがな。花嫁姿の沙帆子ちゃんと離れ離れになって、寂しいんだろ？ しつかし、綺麗な花嫁さんでしたね、おじさん？」

敦は啓史を無視し、宗徳に話しかけた。

宗徳は笑みを見せ、同意するように頷く。

「なあ、いまだんな気分だ？」

興味深そうに敦が尋ねる。

「最高の気分さ」

啓史はとげとげしく答えた。

「こりゃこりゃ、新郎つてのは、みんなお前みたいに神経が逆立ってるもんなのかな？」

啓史は敦を睨みつけた。

「こえくなあ、そう睨むなよ。彼女もいない身にとつては、すっげえ羨ましいんだぞ。もつとこう素直にさ、花が咲いたくらい嬉しい顔して見せろよ」

花が咲いたくらいのこと……などと自分で言いながら嘖き出している敦に、辛抱の糸が切れかかる。

「いい加減にしろ。殴られたくなかったらな」

啓史は声を潜めて言い、拳を固めて敦を威嚇した。隣に座っている父の耳には、はっきりと聞こえているんだろが、何も言っていないからだった。いくらなんでも、啓史がこんな場で友人を殴ることはないとわかっているからだろう。

「そう言うなよ。お前が結婚する日が、こんなに早く来ようとは……」

敦は急に態度を変え、しんみりと言った。

「おかげで俺の世界は、天地がひっくり返ったぜ」

「飯沢さん、飲み物はいかが？」

母が聞き、敦は顔を向けた。

「おばさん、それじゃ、もらおうかな」

「何がいかしら？」

「ウーロン茶でいいですよ」

母はすぐにウーロン茶を入れたグラスを敦に渡した。

「そうそう、お前と沙帆子ちゃんに、結婚祝いを持ってきたんだ。披露宴のあと渡すから楽しみにしててくれよ」

……飯沢からの結婚祝い？

なんだか知らないが、物凄く嫌な予感がある。

こいつ、いったい何を持って来たんだ？

敦が以前にくれた、エロいDVDが頭に浮かび、嫌な予感が増す。

「親父とお袋からの祝いでもあるんだ」

おじさんとおばさんから？

そう聞いて、かなりほっとした。ならば、エロいDVDではないだろう。

「そうか、俺が礼を言っていたと伝えてくれ」

結婚式が終わったら、日を改めて沙帆子を連れてお礼に行きましょう。おじさんもおばさんも、彼女を連れて来いと言っていたしな……

「おお。大事にしてやってくれよな」  
啓史は眉をひそめた。

大事にしてやってくれ？

妙な言い回しだ。まるで生き物に対して言うような……

ま、まさか……

「お前、犬猫のたぐいなら、あそこじゃ飼えないぞ」

「ああ、大丈夫だ。犬猫とかじゃねえよ」

なんだ違うのか？

「大事にしてやってくれなんて言うから、てつきり……」

「ああ。あとでわかるって」

敦はにやにやと笑い出した。

ひどく気になるが、生き物でないなら、まあいいだろう。敦の両親からの祝いでもあるなら、それほど妙なものではないはずだ。

またノックの音がして、スタッフが部屋に入ってきた。

「それでは、そろそろ皆様、披露宴会場へ」

スタッフの言葉に、啓史はほっとして立ち上がった。

「新郎様は、こちらに」

敦が続いて部屋を出た啓史に、スタッフが声をかけた。敦と両親に小さく頷いた啓史は、スタッフのあとについて行った。

沙帆子の控え室らしいドアの前で、スタッフが立ち止まった。

「もう、おいでになりますので」

その言葉に啓史が頷いたとき、ドアが開き、沙帆子の両親が出てきた。

彼らの背後から真っ白なドレスが覗き、啓史はゆっくりと視線を上げていった。

沙帆子はベールをつけていなかった。その代わりに、キラキラと輝く髪飾りをつけていた。なんとこういうものなのか、啓史には名前がわからなかったが、お姫様がつけてそうなやつだ。

沙帆子は言葉を失うほど美しい。

啓史はなんとか自分を律した。

「行こうか」

沙帆子はためらう様子を見せながらも、自分から啓史の腕に手をかけてきた。そのことが、ひどく嬉しかった。

彼女と触れあっていると、満ち足りた気持ちになる。啓史は沙帆子を連れて披露宴会場へと向かった。

## 6 価値あるアイテム

婦人に連れられて、会場の扉の前までやってきた。  
 今度は披露宴……か。

精神的な疲労を感じるが、参加者は気心の知れた者ばかり……スペシャルな披露宴が  
 どんなものだろうと、持ちこたえられるだろう。

「それでは、ご両親様、お先に中へ」

婦人はふたりの後ろにいた幸弘と美美子に、やわらかな声で呼びかけた。

幸弘が啓史の脇を通って前に出てきた。チャペルでの式が終わってから、すでに何度  
 も目にした、幸弘の何か言いたげな表情……

幸弘は含みのある眼差しを何度も向けてきたが、まるで自分に禁じているかのよう  
 に口を開かなかった。その胸中には、言いたいことが山ほど詰まっているのに違いないの  
 に……

「あなた」

幸弘の肩に触れながら、美美子がそつと呼びかけた。

「う……わかってる」

小声で答えた幸弘は、沙帆子にほんの一瞬目を向け、扉の中へと入っていった。

何か準備があるのか、婦人はふたりをなかなか入場させない。

いまの自分にとって、こんな風にただ待つだけの時間というのは、たとえほんの数秒  
 であっても落ち着かない。

さつさと終わらせたい。無事に、何事もなく……

苛立つ啓史だったが、父に言われた言葉を思い出した。

もつと味わえ……か。

確かにそうだよな。

もつと味わうべきだ。このままではかい悔いを残すだろう。

ずつと手に入れたいと切望していた沙帆子との披露宴なんだぞ、もつと余裕を持って  
 楽しめよ。

自分を諷め、啓史はウエディングドレス姿の沙帆子を見つめた。父の言葉に従い、味  
 わうように……

沙帆子は緊張しているようで、表情が強張っている。

小刻みに震える睫毛、きゅつと引き結んだ唇。

だが、美しい……

二年前の学園祭を思い出した。

啓史は前任の化学の教諭に誘われ、沙帆子のクラスの出し物である演劇を観た。舞台上に立っていた彼女に気づいたときの激しい衝撃……それと同じ胸の震えを、いままた感じている。

あのときの沙帆子は啓史のことなど知りもしなかった。なのに沙帆子は、俺の心の中に有無を言わず入り込んできたのだ。

とんでもないやつだ。……こいつ……

可愛い顔して……俺に散々苦悩を味わわせやがって……

もちろん、そんな啓史の苦悩が、彼女のせいでないことはわかってる。

だが……理不尽な気がするのだ……とてつもなく……

「新婦様、笑顔を」

婦人の言葉が耳に入り、啓史は思考を止めて沙帆子を見つめた。

彼女はなんとか笑みを作ろうとしている。

「中で待っているのは、さっきまで一緒に写真を撮ったりした、知っているやつらばかりなんだぞ」

不要な緊張をほぐしてやりたくてそう言ったが、沙帆子は啓史に責めるような瞳を向けてきた。

拗ねているようだ。

思わず噴き出しそうになり、啓史は口元にぐっと力を入れてなんとか堪える。

すると、沙帆子の表情が急に変わった。

「せ、先生……」

呼びかけてきただけで、沙帆子はそれ以上何も言おうとしない。だが、何か言いたいことがあるのははっきりと伝わってくる。

中途半端なことをされては、ひどく気になる。

「なんだ？」

今度は意識してやさしく問いかけたのに、沙帆子は瞳を揺らすだけで何も言わない。

こいつの心は、ずっと不安定なままなんだよな。

とんでもなく無理をしているんじゃないのか？

「お前……」

ここまで来たが、彼女が結婚をやめたいのなら、望みを聞いてやるべきだろう。

こいつのために……

だが、どうしても口にできない。

自分のひと言で、すべてをバアにしたくない。

俺は間違いを犯しているんだろうか？

自分の気持ちだけを優先し、彼女の心をないがしろにしているのだろうか？  
「な、なんですか？」

じっと見つめていると、沙帆子が焦ったように聞いてきた。

「いや……」

はつきりさせろと責める自分の心の声に気づかないふりをして、啓史は目を瞑った。  
「よろしいですか？」

啓史は迷いを打ち消し、問いかけてきた婦人に「はい」と答えた。

ふたりのスタッフが扉の両側に立ち、スタンバイしている。

婦人が頷くと、スタッフたちはゆっくりと扉を押しした。

するとバイオリンの音が、背後で響き始めた。驚いて振り返ると、いつの間にかやってきたのか、楽器を手にした者たちが並んでいる。

生の演奏とは……

彼らは笑顔で、それぞれの持つ楽器を奏でている。

どうやら彼らは、啓史たちの後ろに続いて入場するようだった。

演奏は見事なのだが……

彼らを引き連れてぞろぞろと入場するわけか？

……滑稽すぎる。

会場では、バイオリンの音色に合わせて、ピアノを弾いているようだ。

こんなご大層な演出なんて頼んでねえぞ、と憤ったが、スペシャルコースを依頼したのは自分であることを思い出し、なんともいえない気分になる。

引きつりそうな顔をなんとか真顔に保ち、啓史は沙帆子と腕を組んで歩を進めた。

参加者全員が、ドアを囲むように集まっていた。啓史たちの姿が見えたのと同時に、いつせいに手を叩き始める。祝いの拍手なのだろうか……

死ぬほど恥ずかしい。

皆は、啓史と沙帆子それぞれに祝いの言葉をかけてくる。

ありがたかったが、写真撮影のときから祝いの言葉は何度ももらっていて、正直もうお腹いっぱいという気分だ。

スタッフに促され全員が着席し、啓史と沙帆子も席に着いた。テキパキと動いてくれたスタッフに、啓史は胸の内で感謝した。

「では、新郎佐原啓史様と新婦沙帆子様披露宴を、執り行いたいと思います」  
明るく弾むような牧師の弟の一声で、披露宴が始まった。

大きな円卓を囲む参加者たち。会場には、期待と緊張が満ちている。

「それでは、新郎佐原啓史様、新婦沙帆子様、婚姻届に署名捺印を」

啓史は思わず目を見張った。

披露宴で婚姻届を作成することは、前もって沙帆子の両親と打ち合わせしていたが、まさか開始早々とは……

これは牧師の弟の演出なのか、それとも両親たち？

啓史は幸弘と目を合わせようとしたが、目の前に婚姻届の用紙を差し出され、視界を遮られた。

婚姻届か……

ゴクリと唾を呑む。

吹けば飛ぶようなうすつぺらい紙のくせに、その存在感たるや圧倒的だった。

これにサインをして役所に提出すれば、沙帆子は法的に自分の妻となる。

啓史は、用意されたペンを取り、婚姻届に書き込んでいった。

ためらいはない。というより、早く沙帆子にサインさせたくて、気が急いでならなかった。

必要箇所すべてに書き込んだかどうか、最後にしっかりと確認し、印鑑を取り出すためにポケットに手をつ突っ込んだ。情けないことに指先が小刻みに震える。緊張と興奮が胸の中で入り混じる。

用紙に判を押そうとしたところで、ゴクリと喉を鳴らす音が複数耳に届いた。顔を上げて参加者たちを見渡す。

皆、固唾を呑んで見守っている。

啓史はあえて何食わぬ顔であっさりと判を押した。

「ああっ」

順平が思わずというように叫んだ。目を向けると、弟は徹から速攻お目玉を食らったようだった。

啓史はペンと婚姻届を沙帆子に手渡した。

かなりためらうのではと思ったのに、彼女はすぐに書き始めた。だが、ペンを持つ彼女の指は震えている。

これは、皆の注目を浴びて緊張しているせいなんだよな？ そう思いたい。

一文字一文字、時間をかけて書くため、すべて書き上げるのにひどく時間を要した。おかげでその間、啓史はじれじれとした時間を過ごすことになった。

書き終えた沙帆子は、ほっとしたように息を吐き出した。啓史もまた、安堵して息を吐く。

だが、まだだ。

「あとは捺印だけだ」

そう沙帆子を促し、啓史は幸弘と芙美子に顔を向けた。

ひどく顔を強張らせていた幸弘は、啓史と目を合わせて顔をしかめた。そして、沙帆